現代の文学＝42

石原慎太郎集

青年の樹
―全―
挑戦
太陽の季節

河出書房新社

現代の文学 42　石原慎太郎集

© 1964

責任編集

川端康成　丹羽文雄
円地文子　井上　靖
松本清張　三島由紀夫

昭和38年 12 月 31 日　初版印刷
昭和39年 1 月 6 日　初版発行

定価 390円

著　者　石原慎太郎
発行者　河出孝雄
印刷者　高橋武夫
装　幀　原弘(N. D. C)

印　刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
函　貼・神崎製紙(ミラーコート)
同納入・東邦紙業株式会社
クロース・日本クロス工業株式会社
同納入・株式会社小島洋紙店

発行所　東京都千代田区神田小川町三の八　株式会社 河出書房新社
電話東京 (291) 3721～7
振替口座 東京 10802

製本・加藤製本
落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

青年の樹……三
挑戦……三一七
太陽の季節……五〇三
年譜……五三九
解説……奥野健男……五四三

挿画　長谷川春子
写真　三木淳

石原慎太郎集

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

青年の樹

（一）

電車の中には新しい詰襟が沢山見られた。方々で入学式があるのか、両親らしいつき添いと連れだった若い学生の姿が何人も見られる。

彼らの様子はなんとなくぎこちなく、その詰襟はきゅうくつそうで、やっと一人歩き出来るようになったくらいの鳥を連想させた。その内の何人かは武馬と同じ丸い銀杏のバッジを襟につけている。

電車の震動にゆられ半ば瞑黙しながら、達之助は実に満足そうだった。武馬はこんな表情の父を久し振りに見た。

駅毎に新しい学生服が出入りする度、それを一人一人見送りながら達之助はしきりに、「ふむ、ふむ」と頷く。

蒲田でまた一人、武馬と同じ襟章が乗り込んで奥に入ると、達之助は促すように武馬を見返り、にやりと笑う。が、すぐに、微笑い返す武馬をことさら圧えつけるよう、

「まだ一人前じゃない」

嘯くようにまた言った。

それは達之助の口癖だ。言われる度、半分くらいはかっともなるが、その時は武馬はただ黙って笑った。

入試合格の通知電報が来た時も、手をとり合って喜ぶ武馬と母の悠子を叱りつけ妙に悠々と電報を読み直し、その癖自ら久し振りに神棚へ燈明を上げたりしたが、その後で、

「まだ一人前じゃない」と矢っ張り言った。

あの時は悠子が達之助に向って抗うようにして息子を讃めた。

「一年浪人したんだ、半分は当り前だ」

達之助は言った。

「お父さんは片輪よ。お前が利口でなかったらきっとひねくれた子に育てている」

悠子が珍しく言い返すと、

「馬鹿を言え、俺は武馬を信用している。がとにかく目でたい。がまだ一人前じゃない」

達之助はまた言った。

とにかくそれが武馬を育てる彼の方法だったことは間違いない。彼は今まで殆ど父に讃められたことがない。陰険に叱られたこともなかった。何をやっていても、達之助は黙ってそれを見てい、かんじんなところへ来ると叱咤した。

武馬が何かをやってのけるとか成功したりしても、一度は感心してそれを認めて見せてもすぐに、「まだまだ」と言った。

中学校の三年に、彼が幅跳びで全国競技大会で記録を破って優勝した時も同じだった。だがその時は武馬が言い返した。最終回の跳躍の時助走にうつった瞬間、武馬はどうやって入り込んだかフィールドの審査委員の後に立っている父の姿を見た。彼のチャンスはこの一回だった。彼の対抗者の記録は彼の二回目のそれより一センチ長い。しかし武馬には自信があった。

父を見たがそのまま走り、力一杯飛んだ。その瞬間、達之助が裂帛の気合いと言う奴で、「えいっ」と叫んだ。跳躍の途上の短い一瞬に武馬ははっきりとその声を聞いた。武馬自身より審査員がその声に驚いた。知らぬ者は達之助を悪質の妨害者と見た。

が記録は対抗者を三センチ離した新記録で武馬は優勝をかち得た。

しかし彼には不満があった。達之助は彼の優勝を自分の非常識な声援のお蔭にしたが、武馬は短い跳躍の瞬間ながら、その終り近い部分で父の声のために自分の筋肉が縮んだような気がしてならない。本当に、最後の跳躍の前彼には相手をもう五センチは離す自信があったのだ。

達之助は戦前から戦後にかけて武馬が中学校を卒業する年まで、外国航路の貨物船の船長をやっていた。武馬にとっては幼年の頃から一月二月の長い航海の末にたまに帰って来る父親ではあったが、達之助が彼に見せる親としての表現の強さから、留守ではあってもいつも身近に感じる父だった。

悠子も達之助と比べて尚口数が少かったが、彼女が達之助の留守中に見せる態度は、本質的には父のそれとどう違ってもいはしなかった。それは結局達之助が彼女に知らぬ間にしこんだことだ。

一人っ子で、自分ほど甘やかされずに育った人間は先ずいるまい、と武馬は自身でも思う。

小学校にもまだ上らぬ幼年の頃に、父と母と三人で連れだって町を歩きながら、何かで武馬が遅れ追いつこうと駈け出して待ち受ける両親の眼の前で転んだような時、何処かを打つかすりむくかして、腹這いのまま両親を見上げて泣きそうになる彼を、「泣くな」と言ったまま達之助は黙って見守るだけだった。

血の流れた傷に驚いて駈けよろうとする母を押えて止める父を武馬は子供心にどれだけ憎いと思ったことがあったろうか。

がやがて武馬は決して泣かない子になった。どんな時、どんなに転び、どんな怪我をしても歯を食いしばり黙ってむっくり起き上る子供に育った。

悠子はそんな彼を黙って手当てしてくれたし、達之助は短く「良し」とだけ頷くのだ。

小学校六年の夏、丁度達之助がデンマークから帰っていた時、達之助の使いに出された途中で武馬は中学生の不良の四人組につかまって殴られ、応戦して殴り返され袋叩きにされた。喧嘩に際しての獰猛なる反撃精神も達之助が教え込んだものの一つだった。

挙句に溝に突き落され、落ちながら身をかばったはずみに腕をついて彼は左の手首を折った。皮膚の下から飛びだしかかった骨を見て、折れたことは自分でもよくわかった。

痛みはすさまじかった。が武馬はそれを必死に我慢し、父に言いつかっただけの使いをすましにいった。使い先の主人が顔を見て驚き医者へつれていこうとするのを断り、顔だけ拭かせてもらって帰った。勿論、折れた手は秘した。

帰って来た武馬を見て悠子が驚き、次いでその手首を見て叫び声を上げた時、

「手が折れた」

とだけ彼は言った。

いきさつを聞きながら達之助は悠子以上に慌て、

「馬鹿な奴だ、こういう時はそのまま帰って来るのだ。放っておいて片輪になったらどうする！」

怒鳴るように叱った。

達之助に怒鳴られ、武馬は急に声を上げて泣き出した。こうやって帰って来た末に叱られたのが彼には矢鱈に口惜しかった。泣きわめいて、やけになって飛び出そうとする武馬を悠子が抱きとめ、突っ立っている達之助にこの時だけは叱るように車を呼ばせにやった。

治療を受ける間中、達之助は武馬の右手を握ったまま、ひとことも口をきかずにたち通していた。

顔と頭に絆創膏を張られ、添木を当て繃帯で手を釣って帰った武馬が床で睡ると、それまで唇を細く震わしていた達之助はステッキを握ったまま家を出ていった。

町を探し、武馬を傷つけた四人の内、頭目とその次の二人を見つけて捉えると帯にステッキをさし、片手ずつで二人の襟首をつかまえたまま、少年の家までついていった。

ふだつきの頭目の少年は町の博奕打ちの伜だった。達之助は家の玄関でまだ二人の襟首をつかんだままその親を呼んだ。

言う通りに動かず、伜を手から離そうとして近づいた子分を蹴倒した。青ざめた子分に呼び出された親父の前で、二人を敷き据えたまま、

「子供の悪戯がすぎて、他人に大きな怪我をさせるよう

では困る。親のあんたが言い聞かして、きかないなら折檻なりしないと、他の多勢が迷惑する。お前さんの手でこの小僧の頬っ面を張り飛ばしてくれ」

「なにを言いやがる。餓鬼の喧嘩に親が出ようてのか」

博奕打ちは酒を飲んでいた。

「そうじゃあない。親が出たいが、みっともないのがわかっているから、同じ親のお前さんにこうやって頼むんだ」

「その喧嘩を親同志で買ってやろうじゃねえか」

周りを促すように見て相手は言った。

「この小僧の折檻は明日でもいい。お前さんは酒を飲んでいる。それとも本気でそう言うのかね」

「本気ならどうした、いいからやっちまえ」

動きかかる子分に博奕打ちが言った瞬間、

「馬鹿ものっ！」

つかんでいた襟首を離したその手が、次の瞬間帯にさしたステッキを抜いて、真向に敷台に突っ立った男の額を殴りつけた。返すその杖が狭い玄関の中で、居合いのように真横の男の首をしたたか払った。ぎゃっというような悲鳴で二人の男が玄関に転げ落ちて気を失った。

達之助は玄関先へ飛び出し、ステッキを下げてかまえると、

「来い、手首の代りに貴様ら全部の首の骨を折ってやる」

飛びだした身内の一人が短刀を抜いた時、達之助は鼻で嘲笑った。突っ込んだ男は刃が懐にとどく前に、達之助の黒檀のステッキで頬を張り飛ばされ、前歯を欠いて横にすっ飛んだ。男の落した短刀を達之助は、にやにや笑いながらステッキの先で後に立った仲間の方へ飛ばしてやった。

「次っ！」

の声に男たちは後退した。

威嚇するように片手でステッキを振って見せながら、

「貴様らのような町の屑をみんな片輪にしてしまっても、警察からは逆に表彰が出るわ」

言ってくるりと後を向き達之助は引き返した。

達之助はそのまま知らぬ顔で家に帰って寝た。が噂はたちまち町で評判になり、悠子は外で話を聞かされ驚いて家へ帰った。

達之助はにやにや笑い、

「武馬には言うなよ」

とだけ言った。

博徒たちは仕返しをといきまいているという噂があったが、警察の署長が中に入って手を打った。その席でも、達之助はずかり上座に坐ったまま、やって来る頭に繃帯を巻いた男たちを鼻の先で笑ったような顔をしていた。

以来近所で達之助のステッキは改めて有名になった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

博徒たちは運が悪かった。達之助には狭い玄関で見せたように咄嗟の居合いの術がある。がなにより、そのステッキは達之助の分身のようなものだった。

外出の時、ステッキを手にしていない父を武馬は見たことがない。腕の力を自慢にし、絶えずその鍛練に重い黒檀の杖を片掌で自在に振り廻しながら歩く。

武馬が幼な心に父に畏敬のようなものを感じることがあったとしたら、それは達之助が黒くたくましいその杖を軽々と飛ばして、眼の前をすぎる蜻蛉や蝶を瞬間正確に叩き落して見せるのを眼にする時だったかも知れない。

腕力の保持に気を配った達之助は、陸から船へ乗る時健康をこわして船を去る時まで絶対にタラップを使わなかった。必ず船首からロープを揚げさせ、それにぶらさがって手だけを使って十メートルを越す甲板までよじ昇るのだ。

暇な警備員がいると彼はそのタイムを時計で計らせたりした。若い船員でも容易に出来ぬその離れ技は彼がいく何処の港ででも名物となった。

滅多になかったが船の中での腕力沙汰や、港で船を下りた後の喧嘩は船長の彼が出ると大抵簡単に片がついた。ハンブルグで、酔って無礼な三十貫近いイギリス船員を片掌で引き廻して十メートル近く振り飛ばしたのは、戦前船員仲間では大袈裟でなく国際的に有名な武勇伝でもあった。

同じ体質を受けついでか武馬も力は強い。柄も達之助以上に大きい。しかし、達之助が二度目に体をこわして船を下りた後やっていたパイロットをも引退し完全に陸に上ってしまった二年前までは五十を越した父親に腕力では勝てなかった。

だから達之助は今日になるまで、自分の力について自信がある。大人だてらに自分から腕力を振うなどということは決してなかったが、何かの折には家族の前ででも悠々とその腕をふるい必ず勝った。

例えば達之助には長年の外国航路乗船で得た経験からか、公衆道徳に関して徹底した潔癖感がある。婦人、老人、子供の優先、エレベーターの中での脱帽、禁煙等と、悠子や武馬には勿論、見知らぬ人間に誰彼なく注意を与え、きかないと力ずくでもそれをさせてしまう。悠子も武馬も、昔はその度に身を小さくしたが、今ではそれに馴れて黙って眼をつむるだけだ。

映画館や車内で達之助から注意を受けた与太者やチンピラが、年輩と見て逆におどして来ると、達之助は逆に誘うようににこにこして見せ、図に乗る相手をいきなり叩きのめした。

流石、二度目の病気以来、自ら粛して、或いは幸いそ

うした機会がなくって、武馬はそうしたことを見ることなしに来ている。若い頃の無理がそろそろ出てか、達之助は医者から心臓の注意を受けていた。

武馬の東大の入学式の参観に神戸から昨夜上京して来、疲れたとは言いながら達之助は上機嫌だった。相変らず例のステッキだけはかかえながら、半ば閉じた眼を時々見開いては満足そうに周りを見る。

えてしてこんな機嫌の時、達之助はなにかことを起した。武馬はふとそう思ったが、場合が場合だけに別の胸で安心はしていた。

大森で人が混んだ。孫らしい女の子を連れた老人のために武馬は席をゆずった。父親のお蔭でついた習慣である。達之助は当り前な顔をしてそれを見ている。

と、前の扉から入って電車の半ばに進んで来た別の老人を見ると彼も立ち上って その老人を 案内して 坐らせる。

彼ら親子の行為に坐っていた他の連中が照れくさそうだった。達之助は知らん顔をして外を見ている。二人にならってか斜め後の席から背広を着た青年が立って誰かに席を譲っていた。

大井町でまた車が混み合った。

二人は押されて 中側に入った。 また老人が乗って来た。先刻二人が席を譲った以上の年輩だ。夫婦して田舎から出て来たらしい様子が恰好から知れる。年寄り夫婦は混雑と揺れる電車におびえたように身を支える場所を捜そうとするが、かがんだ腰に吊り皮に手がとどかない。

走り始めた電車がレールのつぎ目でか、大きく揺れた拍子に老婆はよろけて 前にすわった若い男の膝に手をついた。男は露骨に顔をしかめ舌打ちをする。老婆は恐縮して丁寧に詫びを言った。男はただそっぽを向き隣りに坐った仲間へ 何か 話しかける。 その前に 立った二人と、四人一緒の連れに見える。

その内、今度は片方の老人がよろけて下駄で男の一人の靴を踏んだ。

男は声を出して老人を睨みつけた。

「ちぇ、なにしてやがんだ」

先刻の男が言った。

武馬は予感で父を見返った。達之助は黙って彼を押しのけ側の男の前に立った。武馬は久し振りに眼をつむった。

「君ら、立ちたまえ」

達之助は言った。

坐っていた男は咎めるような眼で見返し、横に立った二人は囲むように向き直った。

「馴れない年寄りが困っているんだ。立ちたまえ」
立っていた二人が鼻で笑った。坐った二人が肩をすくめ、その片方が、
「勝手じゃねえか、俺（おれ）だってかったるいよ」
「いいから立ちたまえ」
達之助がくり返した。
「ちぇ、あんたが自分で立つのあ勝手だよ」
周りの人の眼がみんな集っていた。
「美談ぶるなよ。あんたが立ったのあ立派だろうがね、何も人におしつけるこたあるめえ」
瞬間、達之助の右手が左右に動いたかと思うと二人の頬が鳴った。
「な、なにしやがる」
思わず立った二人をぐいと両方に分けると、
「どうぞ、ここへおかけなさい」
振り返って言う。老人夫婦はおびえたように達之助を仰いだ。達之助は促すように笑った。有無を言わせないものがあった。老婆がおじぎして坐りかけた時、
「なに言ってやがる」
片方が意地になって坐った。と見る間片掌で襟をつかんで引き立てられる。
「どうぞ」
達之助は押しやるようにして二人を坐らせた。
男たちに振り返ると、
「良いことをして、良い気持だろう。どうかね」
四人は毒気を抜かれて突ったったままだった。
四人が顔を見合わせた。
「殴ることあねえだろう」
「殴るさ」
「なにい」
「それが一番早い」
達之助は笑うと横を向いた。
電車は浜松町に入りかかった。
「おい、小父さん一寸（ちょっと）顔かしてくれ」
「馬鹿にするな、このままですむと思うのか」
達之助はただ彼らに笑い返した。
武馬は父親の肘（ひじ）をつついた。
「何だ手前（てめえ）は」
「私の息子だ」
「手前の親父に用がある」
男が武馬に言った。肘にかけた武馬の手を達之助は押しのけた。
「お父さん、今日は止しなさい」
「いや、いい、お前は先にいってなさい。後からいくから。こういう連中に言って聞かせることがある」
「やかましいや」

周りの人はすさるようにして達之助たちを眺めていた。

電車が浜松町についた。

「おりろよ」

男の一人が達之助の腕をとった。

「もし――」

老人が言いかけるのを、

「大丈夫、そのままでいらっしゃい」

言うと達之助は囲まれるようにして車を下りた。

振り返って見る男たちの後から、武馬も人をわけて出口へ出た。出ながら武馬は襟のホックだけを外しておいた。

「おい謙、何処へいくんだよ」

武馬が電車を下りた時、戸口の外で待っている客たちの後から誰かが男たちに声をかけた。

男たちがふり返った。三人の男が混雑から離れて彼らに近づいた。彼らの一人はなぶるような薄笑いで武馬をふり返った。

彼らは武馬と達之助を囲むようにして待たしたまま思いがけなくいき合った仲間らしい男たちに小声で何か言った。

話を聞き三人の内の一人が肩をゆすり鼻で達之助と武馬を嘲笑った。

「なんだ、学生に親父か」

「かまうことあねえさ」

「やるだけのことあやってやれよ。俺達もついでに見ててやるぜ」

上りと下りが前後して出てホームは空いていた。彼らは二人を囲むようにして出口の階段とは逆の田町の方角のホームの隅へ歩いていった。上着の一番下のボタンを外す武馬を後から一人が小突いた。

達之助は少しばかり肩を張って、ゆっくり一歩一歩大股に彼らに挟まって歩いていた。

父のこんな後姿には幾度も見覚えがある。武馬は落ちついた。それに父のこうした事件に息子として彼が手を貸すのは生れて初めてのことだ。四人までは達之助一人にまかしておけたが、七人となると厭でも出ない訳にはいかない。流石達之助はいつものように武馬へお前は向うへいっていろとは言わなかった。これで、少くとも今日だけは達之助に、お前はまだ半人前だ、とは言われずにすむ訳である。

向いのホームを掃除している駅員がぼんやりこっちを眺めていた。

彼らは立ち止った。

「おい親父、どうしてくれるんだよ、人前でいい恥をか

かせやがって」
達之助は両掌で前へステッキをついたまま真ん中に突ったっていた。
「なんとか言えよ」
「ふむ」
と達之助は笑った。
「君らは少しも恥をかかん。君らは良いことをした。これからは言われずに自分でああしたまえ」
「な、なにを言いやがる!」
言われて頭へ来た相手は達之助の胸倉を掴んだ。
「どうするね」
「こ、このっ!」
相手が掴んだ襟を引いて廻そうとした時、
「馬鹿ものっ!」
前で握っていたステッキの固い握りが真下から男の顎を突き上げた。男は仰向けから一転してホームの石の上に転がった。
「やっちまえ!」
の声の前に武馬が右横の二人へ体当りを食らわせ、返る反動で左の一人の胸へ頭突きを食らわす。迫って来る右の一人の股の間を力まかせにまた蹴上げた。
それと同じ瞬間、
「た、はっ!」
と言う気合いで達之助のステッキが残る三人の二人の首筋を叩きつけた。返す一閃で残りの一人を打った時、相手が感よく首を縮めた。ステッキは流れて横の駅名を記した看板の柱を打った。あっと言うはずみでステッキが手から離れた。相手も馴れているか瞬間のその隙に飛びこむように達之助の腰へしがみつく。
男の腰のベルトを握ってしがみついた相手の体を両掌で足から逆に吊し上げると、そのままふり廻し網を打つように放り出した。流石に腰がよろけた。その隙に起き上った一人が飛びかかった。達之助の腰が崩れ二人は重なったままホームに倒れた。
武馬は左の一人を殴り倒した。男は倒れた達之助の顔につまずいてひっくり返る。父を助け起こそうと走りよったところへ右の一人が足をかけた。倒れながら横っつかみに男の胸をとらえて振り飛ばすように前へ投げつける。
倒れた武馬の上へ後の一人が飛びかかる。蹴上げたが次の男が重なって来る。組みついたまま二人はホームを転げた。
転がってしまうと二人で七人はなんとしても分が悪い。起き上ろうとする出鼻をしたたか殴りつけられる。眼から出た火の中で、やっと起き上った相手の一人が落ちたステッキを逆にふりかざして達之助へ襲いかかるの

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton